

【資料紹介】

藤枝市中ノ合遺跡から出土した扉板について

中川律子

要旨 藤枝市中ノ合遺跡は志太平野の北東部に位置する集落遺跡である。調査原因となった新東名（第二東名）高速道路の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査では葉梨川流域に数多くの発見をもたらした。瀬戸川層群から続く丘陵の裾に築かれた弥生時代後期から古墳時代の集落と低湿地に広がる水田、低丘陵地には須恵器窯や古墳時代の後期群集墳など、当地域の新しい資料が著しく増加した。それらを再整理するなかで中ノ合遺跡から出土した木製品のなかに扉板があることが判明した。接合して扉板となった木製品資料の再報告をするとともに、県内の類似する木製品を交えて扉板の構造を考えてみる。

キーワード：建築部材、古墳時代前期、寺家前遺跡、志太平野、集落、樹種同定、扉板、中ノ合遺跡、葉梨川

1 はじめに

藤枝市中ノ合（なかのごう）遺跡は静岡県内の新東名（第二東名）建設工事に伴って埋蔵文化財の発掘調査が行われた。中ノ合遺跡は当センターの前身である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成12年から平成15年にかけて現地調査を実施し、その後、資料整理を経て、平成22年3月に発掘調査報告書が刊行されている。

今回は平成21年度に刊行した『中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡』（以下、『中ノ合遺跡』）で報告された資料のうち、第85図314と第86図315は接合することが明らかとなったため、この木製品の再報告を目的とする。また遺跡周辺部の葉梨川流域でも関連する資料が発見されていることから、これら資料をまとめて紹介する機会としたい。

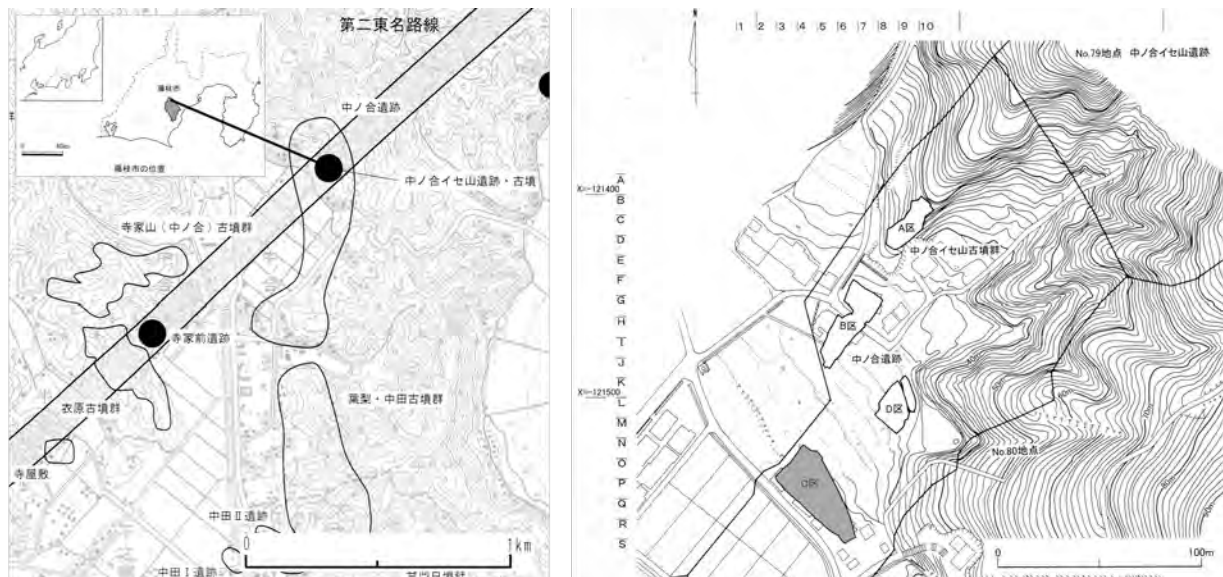


図1 遺跡位置図と中ノ合遺跡C区

2 遺跡の概要

中ノ合遺跡は藤枝市中ノ合に所在する。藤枝市北東部の天王山から南東に派生する丘陵と葉梨川左岸との間の沖積微高地上に位置する（図1）。遺跡は現在の中ノ合地区にあり、葉梨川の中流域にあたる。瀬戸川丘陵に端を発する葉梨川は、今現在、遺跡から直線距離にして350 mほど離れている。しかし弥生時代から古墳時代当時の葉梨川は丘陵裾の微高地縁辺部を大きく蛇行しながら中ノ合遺跡の南西側を流れていたと思われる。遺跡調査前の当地は、葉梨川から丘陵の麓へ

水田が広がり、丘陵裾に住宅等が点在していた。こうした場所に新東名の本線部分が架かることになり、平成12～15年度にかけて発掘調査を実施した。その結果、丘陵裾のC区では竪穴住居跡11軒と掘立柱建物跡1棟のほか、性格不明の遺構6基、小穴、土坑、溝など、居住域に伴う遺構群が検出された。見つかった遺構の年代は竪穴住居跡に伴って出土した土器の年代からすると古墳時代前期が主体である。当時も居住域であり、土地利用は現代とさほど変わっていないと言える。

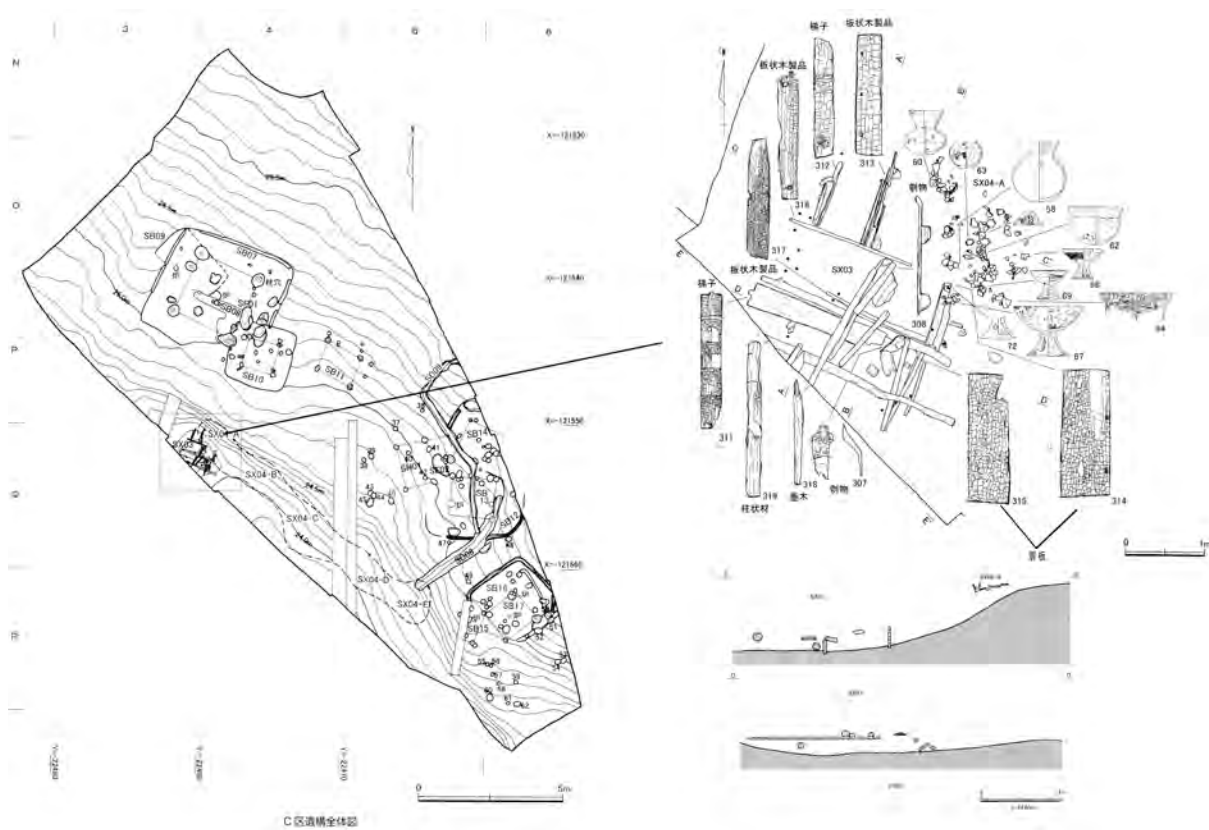


図2 中ノ合遺跡C区全体図と性格不明遺構S X 03



写真1 中ノ合遺跡C区



写真2 中ノ合遺跡S X 03



写真3 中ノ合遺跡扉板表面



写真4 中ノ合遺跡扉板裏面



写真5 中ノ合遺跡扉板上端部



写真6 中ノ合遺跡扉板下端部

中ノ合地区ではこれまでに藤枝市教育委員会による市道改良工事に伴う発掘調査や財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所による新東名建設工事に伴う発掘調査が行われている。今回の調査区よりも400 mほど南側では昭和59年に市道中ノ合・山根線の道路改良工事に伴う確認調査で遺跡が発見され、昭和60年に藤枝市教育委員会が中ノ合遺跡の包蔵地内を調査している（藤枝市 2007）。また葉梨川を挟んだ対岸では新東名建設工事に伴い平成11～18年度（平成14年度は途中中断）にかけて寺家前遺跡の発掘調査が行われている。寺家前遺跡では弥生時代後期～古墳時代初頭の集落遺構や水田遺構などが見つかった。寺家前遺跡の

さらに西側にある低丘陵上も新東名建設に伴って遺跡調査が行われ、衣原遺跡・衣原古墳群・衣原古窯群の発見が相次いだ。中ノ合地区より2 kmほど南下した低湿地では、昭和53年に藤枝バイパスの建設工事に伴い、上藪田モミダ遺跡と上藪田川の丁遺跡の調査が実施されており、弥生時代後期の集落遺構が見つかった。

3 「扉板」について

（1）出土状況

中ノ合遺跡のC区では丘陵裾から低地へと続く微

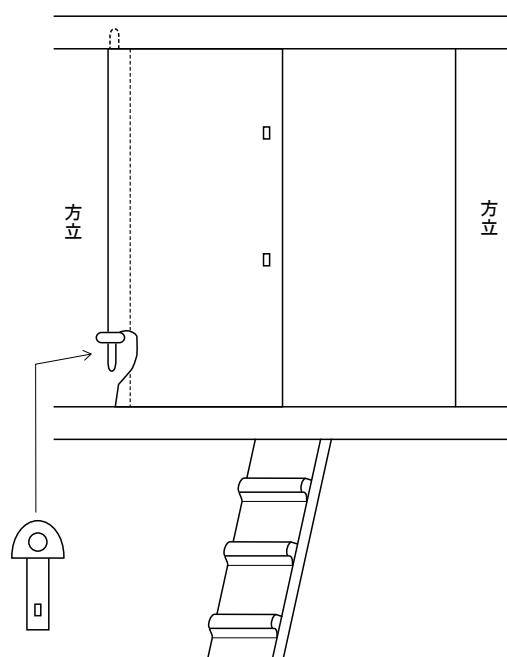
高地上で竪穴住居跡等の遺構を検出した。住居跡から南西方向への地形は徐々に下がり、現地形もこの付近から南西は低湿地となっている。調査区内でも標高 24.5 m 付近から南西方向へ急激に落ち込んでいる。この微高地から低地へと変わる縁辺部で性格不明遺構 SX03 が見つかった。

性格不明遺構 SX03 は竪穴住居 S B 10 (標高 25.2 m、面積 18.1 m²) から南西側へ下がった低地付近で検出し、盛土、杭列、木製品、石等によって構成された木組み遺構である (図 2、写真 1・2)。上層では土師器の集積 SX04 を検出し、SX03 はその土師器を取り除いた下層より見つかった。『中ノ合遺跡』報告書内の第 85 図 314 と第 86 図 315 は、この木組み遺構の一部に使用された状況で出土している (図 2)。第 85 図 314 は南北方向の列状に配された木製品のひとつで、板の側面を立てた状態であった。第 86 図 315 も近接した位置で見つかった。出土状況から推察すると扉板は本来の役目を終えてから分割され、木組み遺構へ廃材利用されたものと考えられる。なお木組み遺構の性格については明らかになっていない。遺構の周囲から土師器の集石や種子核が多く見つかったことから、祭祀的な意味合いを持つ場所であった可能性もある。

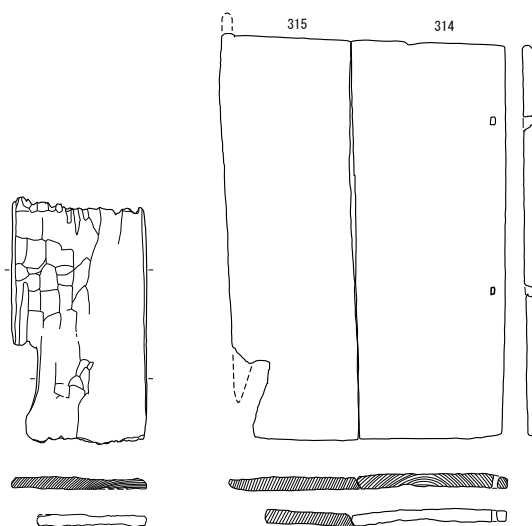
(2) 形態

『中ノ合遺跡』報告書の第 85 図 314 と第 86 図 315 を接合すると図 3 (写真 3・4) のような形状になる。接合した扉板は長方形の板状を呈する。長さ 87.4 cm、幅 61.0 cm、縦横の比率は 6 : 4 と身幅の広い板である。板は最大 3.0 cm ほどの厚みを持つスギの柾目材を使っている。木目からみると比較的木芯部に近いところを使っていることがわかる。木目から推察するに原木の直径は推定 1 m 以上あっただろう。右側面寄りには 2 箇所の柄孔が設けられている。柄穴の形状は縦 3.3 cm、横 1.6 cm 程の長方形である。板の表面には右端に開けられた 2 箇所の柄孔以外には特別な細工は見られない。また板の表面はどちらか片面が著しく風化しているということもない。

板上端部の左端には円柱形の突起があったと思われるが折損している (写真 5)。この突起が出入り口の楣または蹴放しの扉軸孔に差し込まれる軸部にあたる。対する左下端部には側面から挟りこまれた加工がある (写真 6)。この部分は破損しているため、もとの形状が分かりにくい。図 3 の復元想定線のように、板側面から大きく湾曲状に挟り込んだ加工が施され、これにより軸部のように突出した部分を作



扉構造模式図

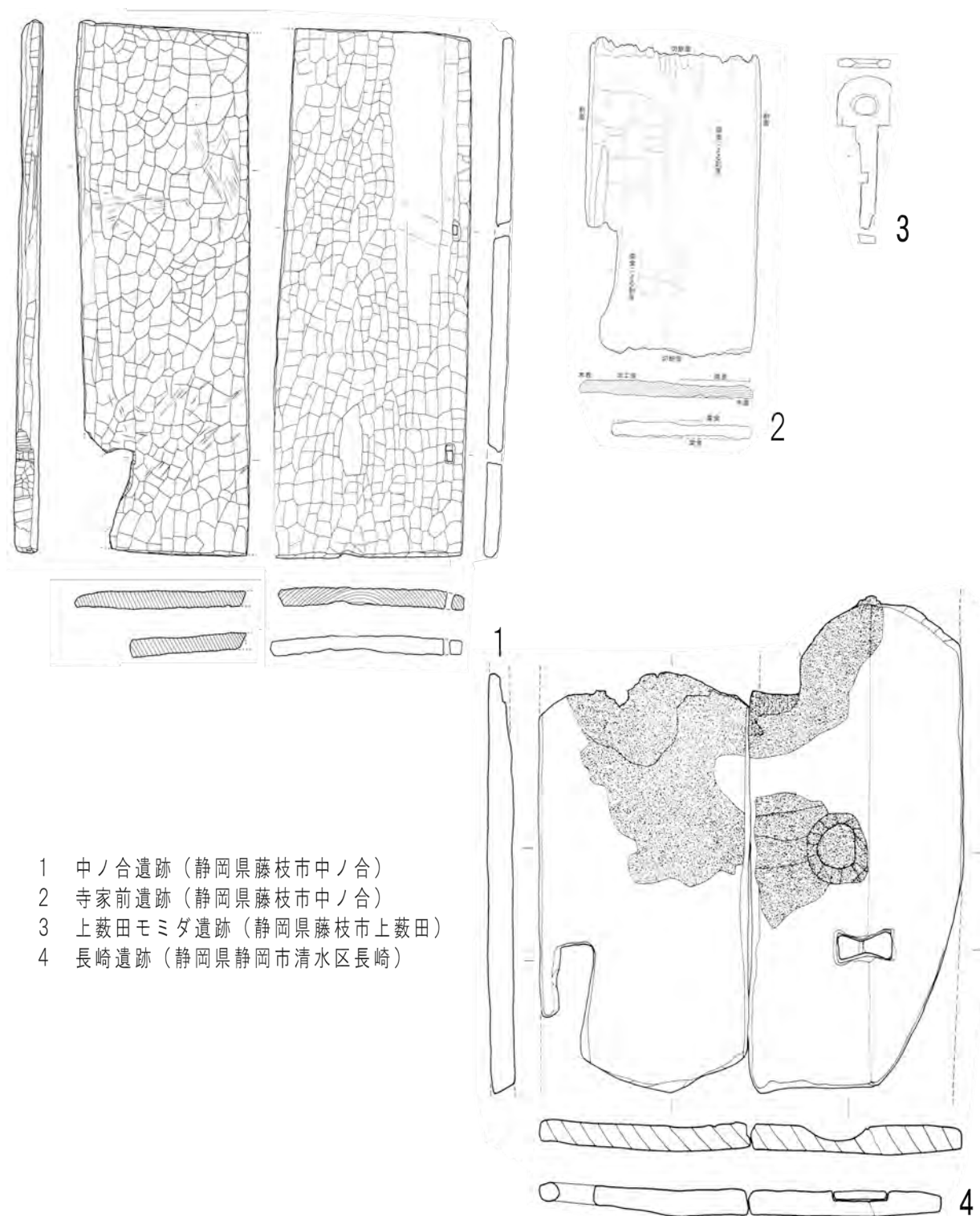


寺家前遺跡
(『寺家前遺跡Ⅱ』第 3 図 2)

中ノ合遺跡

0 1:16 20cm

図 3 扉構造模式図



- 1 中ノ合遺跡（静岡県藤枝市中ノ合）
 2 寺家前遺跡（静岡県藤枝市中ノ合）
 3 上薮田モミダ遺跡（静岡県藤枝市上薮田）
 4 長崎遺跡（静岡県静岡市清水区長崎）

図4 静岡県内出土扉板と関連木製品（S = 1/10）

表1 静岡県内出土扉板類似例

番号	遺跡名	市・町名	器種名	表面状態	樹種名	時代	備考
1	中ノ合遺跡	藤枝市	扉		スギ	弥生時代後期	
2	寺家前遺跡	藤枝市	扉		スギ	弥生時代後期	
3	上薮田モミダ遺跡	藤枝市	栓			弥生時代後期	
4	長崎遺跡	静岡市	扉	炭化	スギ	弥生時代後期	

り出している。図3には扉板の構造模式図として使用されていた状態を想定してみた。扉板の左側上下端部にある軸部は楣または蹴放し、方立等に固定するための加工であり、右端にある2箇所の柄孔は扉の開閉に必要な把手または紐などを取り付けるための加工なのであろう。本図では挟り込みのある軸部を下に置き、板を縦に配しているが、上下逆の配置も考えられるだろう。縦横比からして横に配する薮板にも似ているが、上下の軸部が同じ形状ではないことから、本模式図は縦に配する板とした。

(3) 樹種

扉板は樹種同定結果が報告書に掲載されているとおり、スギの柂目材である。静岡県内の出土建築部材は弥生時代後期から古墳時代初頭および古墳時代前期の年代に、スギの大径木を使って製作加工することは決して珍しいことではない。中ノ合遺跡の南に広がる志太平野や安倍川流域の静岡平野でもこうした木材利用はごく一般的なことである。今回の資料が接合したことにより木取りを見ると、少しでも幅のある板を取るために直径1mを超える原木材から最も木芯部に近いところを選んで製材していたことがわかる。

(4) 類似例

扉板は左右どちらかの上下端部に軸部を作り出している形状が従来一般的に知られているが、ここ最近、中ノ合遺跡の扉板のような形状の軸部をもつ製品が少しずつ増えて来ている。中ノ合遺跡の西側に位置する寺家前遺跡では弥生時代後期後半期の掘立柱建物の柱穴より礎板に転用された同じ形状を持つ扉板が見つかっている(図4-2)。また2kmほど南にある上薮田モミダ遺跡(弥生時代後期)からは軸部を受ける部材と思われる木製品が出土している(図4-3)。静岡平野の北東部に位置する長崎遺跡(弥生時代後期)からも同形の扉板と思われる木製品が出土している(図4-4)。

(5) 扉板の用途と問題点

中ノ合遺跡の扉板は掘立柱建物の出入口などに取り付けられた建築部材のひとつであったことは間違いないだろう。しかし(2)形態の稿でも述べたとおり、扉板であったのか薮板だったのか、現段階でどちらか特定することは難しい。仮に扉板であったとしたら、どのように取り付けられていたのか。また上下に円柱

状の軸部を持つ扉板とは何が違うのか。組み合わせる楣または蹴放し、方立等は周辺遺跡から見つかっておらず、県内の類似資料も少ないため、扉の構造はまだ不明な点が多いのが現状である。

4 おわりに

今回は『中ノ合遺跡』の報告書に掲載された木製品が接合し、扉板と判明したことをきっかけに再報告をした。また中ノ合遺跡の周辺遺跡から出土した類似例を合わせて紹介した。時間的な制約もあり県内の一部の資料を紹介したに過ぎないが、今後も類似する資料を丹念に探して検討していく必要がある。こうした資料を集積していくことにより、当該期の木製品加工の技術や地域的な様相が判明していくことに繋がるだろう。

参考文献

- 藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1981 『国道1号藤枝バイパスく藤枝地区く埋蔵文化財調査報告書第6冊 上薮田モミダ遺跡・上薮田川の丁遺跡・鳥内遺跡』藤枝市教育委員会
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『長崎遺跡Ⅱ(遺構編)本文編』
- 守山市教育委員会 2001 『下長遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
- 山田昌久編 2003 『考古資料大観8 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館
- 宮本長二郎 2007 「No.490 出土建築部材が解く古代建築」『日本の美術3』至文堂
- 藤枝市史編さん委員会 2007 『藤枝市史 資料編1 考古』藤枝市
- 島田敏男他 2010 『遺跡出土の建築部材に関する総合的研究』独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 島田敏男他 2010 『出土建築部材における調査方法についての研究報告』独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所他 2010 『中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財センター他 2013 『寺家前遺跡Ⅱ(木製品・石製品・金属製品他編)』
- 静岡県埋蔵文化財センター他 2014 『寺家前遺跡Ⅳ(弥生時代後期～古墳時代前期・総括編)』